

## 2018年聖霊降臨祭礼拝説教

「今も働かれる主イエス」(ルカによる福音書 4:38～44 節)

### 【聖書箇所】

38 イエスは会堂を立ち去り、シモンの家にお入りになった。シモンのしゅうとめが高い熱に苦しんでいたのもので、人々は彼女のことをイエスに頼んだ。 39 イエスが枕もとに立って熱を叱りつけられると、熱は去り、彼女はすぐに起き上がって一同をもてなした。 40 日が暮れると、いろいろな病気で苦しむ者を抱えている人が皆、病人たちをイエスのもとに連れて来た。イエスはその一人一人に手を置いていやされた。 41 悪霊もわめき立て、「お前は神の子だ」と言いながら、多くの人々から出て行った。イエスは悪霊を戒めて、ものを言うことをお許しにならなかった。悪霊は、イエスをメシアだと知っていたからである。 42 朝になると、イエスは人里離れた所へ出て行かれた。群衆はイエスを捜し回ってそのそばまで来ると、自分たちから離れて行かないようにと、しきりに引き止めた。 43 しかし、イエスは言われた。「ほかの町にも神の国の福音を告げ知らせなければならない。わたしはそのために遣わされたのだ。」 44 そして、ユダヤの諸会堂に行って宣教された。

## 1 聖書箇所

今日は聖霊降臨祭、ペンテコステの礼拝です。今日の礼拝の準備をしている時に、聖書箇所です少し悩みました。今、毎週ルカによる福音書を順にとりあげていますが、それでいいのだろうか？まさに聖霊が天から降臨する場面を描いた使徒言行録2章や、聖霊について述べているパウロの手紙の部分を礼拝の聖書箇所とした方が聖霊降臨を祝う礼拝にはふさわしいのかもしれない…と思ったからです。

しかし、与えられましたルカによる福音書の聖書箇所を読むうちに、『これこそ聖霊降臨を記念して礼拝するペンテコステ礼拝にふさわしいみ言葉だ』と気づかされました。何故ならば、聖霊が与えられてできた教会。その教会の基本的な姿が透けて見えるからです。今日はそれをご一緒に見ていきたいと思えます。

## 2 礼拝の後

今日の聖書箇所は、その前の31節からの出来事の続きです。31節まではカファルナウムの会堂での安息日の礼拝が描かれています。そこで主イエスは聖書のみ言葉を取り次がれました。説教をなさったのです。礼拝には悪霊に取りつかれた人もいたのですが、主はみ言葉を持って、彼を癒されました。人々

は、主イエスの力ある言葉、今までに聞いた事もない言葉に驚き恐れおののいた…私たちが「そのような礼拝を、今ここでささげたい」と思うような礼拝。その礼拝のすぐ後に起こった事です。

当時のユダヤ教の習慣では、安息日に会堂に集って礼拝した後、それぞれの家庭で安息日を祝う食卓をみんなで囲んだようです。喜びの食卓です。天地を創られた全知全能の神が、弱く小さい貧しい民、イスラエルを導いてくださる、その事を覚えて共に喜び食事を一緒にしたのです。私たちも礼拝の後に、喜びの食卓—愛餐会（あいさんかい）をもつ事がありますが、この安息日の食卓が起源ともいえます。

そして、当時は各家庭でもたれた安息日の喜びの食卓に、聖書の教師がよく招かれたそうです。今日のこの聖書箇所では、そのような習慣のもと、主イエスがシモン・ペトロの家で食卓を囲んだ時のことが描かれています。シモンとは、主イエスの一番弟子・ペトロの事です。どうやらペトロは、主イエスから「私について来なさい」と招かれる前から、主イエスと知り合いであったようです。やはり会堂の礼拝で知り合ったのでしょう。その礼拝で主イエスが聖書を説き明かす説教を聴き、御手の業を見て、是非このような素晴らしい人と親しく知り合いたい。そのような思いで、シモン・ペトロは「ぜひ、我が家においでくださり、安息日を共に喜び祝ってください」と頼んだのです。

### 3 シモンの家で

シモンが喜び勇んで主イエスをお連れした家。おそらく庶民の暮らす質素な家であったと思われます。しかも、そこではシモンの姑が高い熱で苦しんでいます。この姑について聖書は詳しい事は語りません。娘婿のシモンの家にいるので、既に夫には先立たれていたと思われます。人々は主イエスに姑の病気を癒してくださるように、口々に頼みます。苦しむ人の為に主イエスにお願いする…私たちの教会も、病気の方々の為に執り成しの祈りをします。主イエスにお願いします。ここに教会の姿が早くも現れます。

ですが、実は当時の細かな規則によれば、病を癒す治療行為は労働と考えられていたようです。「安息日に病人を癒すのは、『安息日に働いてはならない』という神の定めを犯した重大な過ちだ」と考える人々もいたのです。それで後日、主イエスは律法学者やファリサイ派の人々と対立する事になります。

### 4 主イエスの癒し

ですが、主イエスは、硬直化した掟よりも苦しむその人に目を向けられ、人々の願いを受け入れます。姑を癒したのです。それは主イエスしかできない業がありました。それは「姑が高熱に苦しむ」という部分が、「姑が甚だしい熱に縛り付けられて」と訳せる事からわかります。そして、主は、その姑の枕元に立

って熱を叱られた…とあります。もっと詳しく訳すと、枕元に立ってかがみこみ、熱を叱った…と訳せる部分です。「熱を叱る」当時は、熱も悪霊のせいだと思われていたのです。

悪霊は、シモンの姑を熱で縛り付け、神に創られ、神の息を吹き入れられ、「きわめて善い」と言われた彼女本来の姿から遠く引き離していました。主イエスは、その姑を縛り付け、神から遠く引き離していた悪霊に対して叱りつけて、姑を解放したのです。神に創られた、神のご支配のうちに生きる、神の御心の内に生きる本来の姿へと戻した…ともいえます。

このように主イエスの癒しには、単なる病気の治療以上のものがある…と聖書は語ります。主イエスの癒しは、肉体の病気からの回復を含む事はもちろんあります。しかし、それだけではありません。自分を愛し導いてくださる父なる神を覚えてその愛の中に生きる時、人は健やかな命に生かされるのです。目に見える肉体の病は癒えなくとも、父なる神を知る命は健やかな命です。ですから、父なる神を見失っている…という意味では、私たち人間はみな病んでいるといえます。自分達でも気づいていない「病」を癒すために、主イエスはこの地上に来てくださいました。

## 5 癒された者が仕える者へ

主イエスによって、熱の支配から神の支配へと戻ってきた姑。喜び勇んで、主イエスをもてなします。この「もてなす」という単語の本来の意味は、「仕える」です。姑は主イエスによって神から引き離すものから解放されると、主イエスに喜んで仕える者となったのです。

この「仕える」という言葉が、私たちキリストの教会のそれぞれが、神に、人に奉仕する時の言葉にもなりました。例えば今日のこの礼拝をささげる為にも多くの方々の奉仕があります。会場を整えてくださる方、受付、お祈りの奉仕の方々、奏樂をしてくださる方もいます。また、礼拝の後、皆で会堂清掃を行います。これもまた、奉仕です。ここでいう「仕える」という言葉で言い表される行いです。つまり、私たちがそれぞれに教会で行う奉仕の業は、この姑が主イエスをもてなした行いが最初であるとも言えるのです。主イエスから父なる神のもとへと連れ戻された喜びの内に、主イエスに喜んでいただくために力を注ぐのであります。私たち一人一人は、シモン・ペトロの姑だと言えます。

## 6 病人を連れて来る人々と主イエス

この出来事もまたカファルナウムの町に一気に広がりました。日が暮れてからシモンの家に大勢の人が病人を連れてやってきた…と聖書は語ります。ここで何気なく、「日が暮れてから」と書かれていますが、重要な意味があります。

当時の一日は、夕暮れから次の日の夕暮れまで。日が沈むと新しい一日が始まるのです。つまり、安息日が終わってから、人々は病人を抱えてやってきたのです。病人を運ぶ事もまた労働とみなされていました。人々はそのような人の造った掟にも縛り付けられていたと言えます。

主イエスは、そんな人々を深く憐まれたのでしょうか。病気の一人一人に寄り添うように、手を置いて癒された…とルカは語ります。神の御子です。10人、20人とまとめて癒す力もお持ちだったでしょう。しかし、主は敢えてそうはされなかった。一人一人と向き合い、寄り添われました。

私たち人間は、とかく人々をひとくくりにしたがる存在です。民族とか国とか性別とか、職業でひとくくりにしてしまう所があります。その方が楽だからです。しかし主イエスは違います。一人一人をかけがえのない者、父なる神が創られた尊い存在と受け止めてくださいます。だから、一人一人に手を置いて癒されたのです。

## 7 悪霊にもものを言うのを許さない

そうやってイエスさまは多くの悪霊を追い出し続けました。悪霊たちこそ、主イエスの本当のお姿を知っていた…と福音書は語ります。「神の子」というお姿です。しかし、主イエスは彼らにその事を話す事を禁じられました。

私たちだったらどうでしょうか。「どんなに悪い者でも、主イエスの力を伝えてくれるなら、それに越した事はないんじゃないか」と考えてしまいそうです。何故、主イエスは悪霊が「イエスは神の子だ」と言い広める事を禁じられたのでしょうか。

それは2000年たった現代でも議論が絶えないテーマの一つです。多くの神学者、牧師がこの事について考えていますが結論は出ていません。聖書の謎の一つなのです。やはり神は私たち人間には把握しきれない謎の部分をお持ちの方です。私たちは祈りつつ、色々な事を考えていくしかありません。このテーマのように理由がよく分らない事について考えていく事は、神について、主イエスについて深く考える事。それもまた神から頂いた恵みともいえます。

そんな恵みに与ったあるイギリスの神学者がいます。彼がこのように言っているそうです。「主イエスは、悪霊などではなく、私たち人間が自主的に喜んで、“あなたは神の子です”と告白する事を待っておられたのではないか」。私もそう思います。主イエスは私たち一人一人を父なる神から離れてさまよって疲れ滅び去ってよい存在とは考えなかった。父なる神の御許で安心して生きてほしい…と私たちを連れ戻しにこの地上にきてくださった神の独り子イエス・キリストは、私たちにその考えを押し付けるのではなく、私たち一人一人が気づくように願っておられるお方だからです。

しかし、主イエスのこの切なる願いが叶うのは、十字架で苦しみ抜いて亡くなられた後でありました。しかも、神の民ではない、神を知らないローマ帝国

の百人隊長でした。彼こそ、最初に「まことにこの人は神の子であった」と告白した人間であります。

## 8 祈る主

さて、カファルナウムに戻りましょう。40節の「手をおいて癒された」を厳密に訳すと「手をおいて癒し続けた」です。主イエスは休む事なく癒し続けました。そして42節、「朝になった」のです。つまり、主イエスは、病める人々を一人一人、一晩中癒し続けた…とルカは語っているのです。主イエスは、夢中になって癒し続け、朝日が昇る頃、シモンの家を出て人里離れた所へと向かわれました。

何のために？祈るためであったでしょう。ルカによる福音書には、主イエスが度々、人々から離れて祈る姿を描かれています。祈りとは、父なる神との対話と言われていています。人々のもとを離れ、一人父なる神の御前で静まり、その御心を尋ねる時、御声に耳を澄ませる時を主は持たれたのであります。それが主イエスを支えていたのです。

主イエスが何を祈っておられたのかは分かりません。私は、主イエスはこの時悩んでおられたのではないか…と思います。カファルナウムで過ごすうちに親しい人もできてきたでしょう。そして、自分を必要としてくれる苦しんでいる人々もいる、病で困っている人々もいる。だが、神の民が住む他の町々もある、私はこれからどうすればよいのですか？カファルナウムに留まるべきでしょうか、それとも他の町に行くべきでしょうか、私の父である神よ、どうか御心を示してください！…そのように神に祈っていたのではないかと思うのです。

## 9 支配しようとする愛

そこにカファルナウムの人々が主イエスを探し求めてやってきます。この「捜す」はなりふり構わずに“探す”というニュアンスがある言葉です。人々は、深く憐れまれて一人一人の病を癒す主イエスのお姿とその力に大いに心打たれたのでしょう。必死で主イエスを引き止めます。

人によっては、「利用価値のある主イエスに出ていかれたら困る…と思ったからだ」という人もいます。確かにそのような部分もあったかと思えます。しかし、それだけではないのではないかと私は思います。カファルナウムの人々、特に病で苦しんでいる人や弱く貧しい人々は主イエスを愛していたでしょう、大切に思っていたに違いないでしょう。主イエスに触れて頂いた人々は主を愛さずにはおれなくなるのではないのでしょうか。

しかし、私たち人間は神とは異なります。人の愛は自己中心的になりやすい。愛するが故に、自分のもとにいて欲しいと願ってしまうのです。その気持ちが強くなると相手と自分の間にいる神を忘れてしまう事もあります。神とは関係

なく愛そうとする、そして神なしで相手を受愛する時、私たちの愛は、独りよがりの自分勝手なものになります。カファルナウムの人々の主への愛もそうであったようです。主イエスを自分達のうちに取り込もうとする愛、言葉を変えれば主イエスを自分達の愛によって支配しようとしているのです。カファルナウムの人々の中にも私たちの姿が見られます。

## 10 神のみ旨に従う主イエス

しかし、主イエスは神を忘れている人々にお答えになります。「わたしは、ほかの町々にも神の国の福音を宣べ伝えねばならない。自分はそのためにつかわされたのである」(43節)

「宣べ伝えねばならない」の「ねばならない」という部分を詳しく訳すと、「神の国の福音を宣べ伝えるのが、神の御心なのだ」という意味があります。主イエスが支配されているのは、カファルナウムの人々に代表される人間の思いではなく、神の思いである事が分かります。

この「〇〇する事が神の御心である」という表現が再び表れるのは、ルカ福音書の9章、主イエスが弟子たちにご自身の十字架と復活を予告する場面です。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活する事になっている」の「になっている」と訳された部分に同じ単語が使われています。

イエスさまが今始められた神の国の福音を宣べ伝える活動は、やがて十字架のみ苦しみを受け、そして父なる神によって三日後に甦らされる出来事へと続く、それが神の御心であると分かります。

## 11 喜びの命

主イエスがそうして告げ知らせる、「神の国の福音」。これは、「神の国の喜びの知らせ」とも訳せる言葉です。神の国、神の支配、私たちを創ってくださった天の父なる神、正しい愛で私たちを包んでくださるこの父なる神のもとに帰り、父なる神の見守りのうちに、教えのうちに、のびのびと自由に、安心して生きる事こそ、人間本来の姿、神が「きわめてよい」と言った喜びの命！それを主イエスは、言葉と業で告げ知らせるためにこの地上に来られたのであります。

## 12 主の宣教を続ける

主がこの時、カファルナウムの人々に告げた「ほかの町にも神の国の福音を告げ知らせなければならない。わたしはそのために遣わされたの

だ。」の「他の町」。その他の町にここ、私たちの町、横浜が含まれています。ここもまた主イエスが宣べ伝えて下さった町なのです。いやいや、主イエスは宣教されたのはユダヤの諸会堂だ、横浜とは書いていないし、そんな事実もない。第一、主イエスはその前に天に帰られたのではないか、この横浜にはいらしゃっていない…と思う方もおられるでしょう。

しかし、主イエスはこの町にいらしゃっています。聖霊という形をおとりになって、主イエスは今も神の国の喜びの知らせを方々の町で告げ知らせておいでだからです。主は私たち人間にご自身の霊—聖霊を注いでくださり、私たちを通じて宣教を続けておいでです。

聖霊、霊なる神とは何でしょうか？パウロは、私たちには、「アッバ、父よ」と天の神を呼ぶ御子の霊が与えられている…と語ります。また、「誰も聖霊が与えられなければ、イエスを救い主とは呼べない」とも言います。

天地を創られ神が、「きわめてよい」と言って私たち一人一人も創ってくださり愛してくださる父なるお方であるという事、その御神は、ご自身に背いた私たち人間を憐み、ご自身のもとへと連れ戻すために、一心同体の神の独り子主イエスを一人の人間としてこの地上に送られ、私たち一人一人の背きの罪を十字架で償わせたこと、そうして三日後に甦らせ、主イエスの十字架が神の義なる愛の証である事を私たち人間に示された。このイエス・キリストというお方によって起こった出来事の意味を私たちが理解する事ができるようにして下さる、信じる事ができるようにして下さる、それが霊なる神、聖霊です。その聖霊のお力によってこそ、私たちは、天の神を、「アッバ、父よ」と呼びイエスさまを自分の救い主と告白する信仰が与えられ、父なる神の義なる愛の内に、この地上で肉の体のままに神を愛し人を愛して生きる道が開かれ、神の子となる資格が与えられるのです。

人の力ではありません。ただこの聖霊という霊なる神のお力によってこそ、主イエスのもたらした喜びの知らせを宣べ伝える事ができます。いわば今も働くイエス・キリストの霊であります。目に見えない霊、肉体に制限されないイエス様の霊。このお方が与えられているからこそ、教会は、時代と場所を超えて、イエス・キリストによる喜びの命を知り、今、ここ、横浜市霞ヶ丘の地で、主イエスを宣べ伝える事ができるのであります。教会の働きは聖霊の働きです。

聖霊のお力によって、人の集まりである教会が、主イエスの体とされます。つまりここで主を礼拝している私たち一人一人が、それぞれ、主イエス・キリストが愛の業、癒しの業を成される時の主の手であり、み言葉を語られる時の口であり、喜びを告げ知らせる為に方々に赴く足となり、一人一人の喜びや悩みを聞く時の耳となる事ができるのです。父なる神は、2000年前のパレスチナに生きたナザレの人・主イエスとは、時代も場所も大きく離れた横浜に生きる私たち一人一人を、聖霊を通じてイエス様の一部として用いて下さるのです。父なる神を大いに賛美し、感謝をささげたいと思います。